図書館年報を分析する④　＜表Ｄ＞貸出点数

ＴＲＣが作った年報の数値
何故こんなにバラバラなの？

＜表Ｄ＞　図書館年報各表の「貸出点数」の比較					
年　　度	平成 25(2013)	平成 26(2014)	平成 27(2015)	平成 28(2016)	平成 29(2017)
個人貸出点数	1,097,294	1,130,175	1,085,745	1,057,789	1,057,333
資料種別貸出点数（相互貸借等を除く）	1,092,908	1,125,326	1,108,999	1,069,187	1,070,800
年齢区分別貸出点数	1,097,294	1,130,175	1,113,637	1,073,529	1,075,041
市内･市外貸出点数計	1,097,294	1,122,145	1,105,694	1,064,538	1,064,487
市内貸出点数	1,037,075	1,062,431	1,045,517	1,005,036	977,730
市外貸出点数	60,219	59,714	60,177	59,502	86,757
＜注＞　●本来、各年度の色付きの数字は、25 年度(黄表示)のようにすべて同じにならなければならない。ところが、26 年度で 1 か所、27 年度以降はすべての数値が異なる。●27 年度以降は、基幹的数値の「個人貸出点数」が、「資料種別」「年齢区分別」「市内市外計」の、いずれの数値をも下回るという、あり得ない逆転現象が起きている。					

今回は「貸出点数」を取り上げます。貸出点数は図書館指標の中でも最も重要とされ、各図書館の業績比較などには主としてこの数値が使われています。図書館統計の基幹的な数値ということが出来るでしょう。

上掲の**＜表Ｄ＞**は比較のために市民の会が独自に作成したものです。

「貸出点数」の数値は幾つかの表に記載されています。「個人貸出点数」は市内、市外の個人登録者に貸し出した数で、「市内・市外貸出点数計」と同一になります。「年齢区分別貸出点数」は「個人貸出点数」の年齢別内訳ですから、その合計も「個人貸出点数」と同一にならなければなりません。「市内貸出点数」は直営時代には「市民貸出点数」と表記されていましたが、同義と考えてよいでしょう。「資料種別貸出点数」には「相互貸借等を除く」と注釈があります。直営時の注釈は「備品その他資料の貸出をのぞく」となっていて若干意味が違います。しかし、「全体からある部分を除いている」のですから、「個人貸出点数」の数値より大きくなることは決してありません。――以上の前提（認識）で「貸出点数」について分析します。

直営最後の年・平成２５年度版の「貸出点数」には何の問題も見出せませんでした。すべての数値が整合しています。余談ですが、この年度の年報でわたしたちが見つけた唯一の誤りは、「三田市立図書館の図書館指標の推移」という表で、「人口**千人**当たりの購入点数」とすべきところが「人口**一人**当たりの購入点数」となっていたことでした。

同じであるべき数値が３年連続すべて違う

ＴＲＣが運営するようになった平成２６年度版から異変が起こり始めます。それでもこの年は「市内・市外貸出点数計」が「個人貸出点数」の計より少ないという点だけでした。これは、当然同じになっていなければならない数値です。この段階ではまだケアレスミスによる間違いと受け止めてもいいのかもしれません。それにしても、８０００冊もの違いが出たのに誰も気づかなかったというのは、組織として矢張り大きな問題です。

ところが、次の平成２７年度版になると、同じであるべき三つの数値が全て違うという異常なことになりました。一番多いのが「年齢区分別貸出点数」、次が「市内・市外貸出点数計」で、この二つが基幹的データであるはずの「個人貸出点数」を上回っているのです。その差はなんと２万７千冊にも上っています。また、「資料種別貸出点数」までが「個人貸出点数」を超えているのです。この数値は前述のように「相互貸借等を除く」となっているのですから、まったく理屈に合いません。少なくなければならない数値が、逆に必ず多くなるはずの項目の数値を超えているのです。どういう計算をしたらこんな逆転現象が起こるのか想像もつきません。そして、その矛盾に誰も気づいていないのです。三田市の担当課の職員は当然、職責として年報をチェックしなければなりませんが、彼らも見過ごしています。あるいはチェックすらしていなかったのでしょうか。

絶対にあり得ない数値の下剋上現象が続く

誰も気づいていないから、平成２８年度版でも全く同じことが起きました。同じでなければならない「個人貸出点数」「年齢区分別貸出点数」「市内・市外貸出点数」の三つはすべて異なっています。基幹的数値でなければならない「個人貸出点数」が最も少ないのは前年度と同じです。そして、差は１万５７００点ほどに減りましたが、「資料種別貸出点数」が「個人貸出点数」を上回る“下剋上状態”は、この年も続いています。

平成２９年度版でもこの異常な状態は全く同じです。２６年度版作成の段階で道を誤って、それがそのまま修正されることなく４年間受け継がれたという印象を受けます。恐らく経験のない担当者だったのでしょう、集計方法をまったく知らなかったか、あるいは間違ったのでしょう。そして、この大きな誤りに４年もの間、誰も気づいていないのです。遡って全ての版を修正しなければならない状態に陥ってしまいました。もう一度、基礎データから計算し直さなければならないと思われますが、果たしてそんなことが可能でしょうか。

年報に存在しない数値で計算している。何故？

「貸出点数」の誤りは当然のことながら他の数値にも波及します。

図書館年報には「年間実績（指標）」という、図書館指標を網羅した大きな表があります。この中の「貸出密度」は、「市内貸出点数」を「人口」で割って算出します。その年に市民に貸し出された（利用された）本が、市民一人当たりに換算したら何冊（何点）になるか、を表す重要な指標です。次ページの**＜表Ｅ＞「貸出密度」**は各年度の年報の「貸出密度」の数値を一覧表にしたものです。この表も市民の会が独自に作成しました。

この大切な指標の分子となるのは前述の通り「市内貸出点数」です。しかし、２７年度版、２８年度版、２９年度版の３年間、使われている数値は「市内貸出点数」ではありま

せん。どこから持ってきたのか皆目わからない数値が使われています。「市内貸出点数」をそのまま使えば何の問題ないのに、年報のどこにも存在しない数字が突然、ここに登場するのです。

＜表Ｅ＞貸出密度

＜表Ｅ＞　年間実績（指標）の貸出密度(人口一人当たりの貸出点数)

「市内(民)貸出点数」を「人口」で割って算出する

平成 25(2013)	平成 26(2014)	平成 27(2015)	平成 28(2016)	平成 29(2017)
1,037,075 点 / 114,642 人	1,062,431 点 / 114,289 人	1,027,364 点 / 113,541 人	987,953 点 / 113,309 人	958,122 点 / 113,038 人
1,037,075 点	1,062,431 点	1,045,517 点	1,005,036 点	977,730 点
９．０点	９．３点	９．０点	８．７点	８．５点

●貸出密度は「市内(民)貸出点数」を「人口」で割って算出するが、25、26 年度は正しく「市内(民)貸出点数」の数値が使われている。ところが、27 年度以降は「市内貸出点数」とは異なる数値が使われていて、この数値は年報統計のどこにも存在しない(黄色表示が「市内(民)貸出点数」の数値)。

＜表Ｅ＞の赤表示と黄表示の数値を比べてみてください。黄表示の数値が年報所載の「市民貸出点数」です。２７、２８、２９年度は、計算式の分子として使われている数値（赤表示）は、黄表示の「市内貸出点数」の数値よりすべて少なくなっています。当然ですが、分子が大きいほど密度の点数は高くなります。ＴＲＣがわざわざ分子を小さくして成果を低く見せるはずがありませんから、全くの勘違いか、算出方法を理解していないことによる計算ミスなのでしょう。統計知識ゼロの担当者がやったことではないかと疑われます。そしてまた館長も、このことに３年間も気づいていないのです。

因みに、年報に掲載されている「市内貸出点数」を分子にして計算すると、２７年度は９.２点、２８年度は８.８点、２９年度は８.６点と、わずかですが年報記載の数値よりも高くなります。しかし、前述のように「市内貸出点数」の数値自体が、その正確性に大きな疑問符のつくものです。つまり、「貸出点数」統計の全体が極めて信頼性の低いものになっているのです。

一体何故、こんなことが起きるのか。三田市文化スポーツ課の横溝課長殿、質問書への早急な回答を求めます。